

何時頃から禪（フンドシ）を用いなくなったのか、今はお目にかかれない。お相撲さんが締めているのは、まわしというが、昔大人は誰しも禪を締めていた。小学校時代は男の子も女の子もパンツを穿いていなかった。皆着物を着ているので、まくればスツポンポンで丸見えであった。

家で悪さすれば父親から着物の端を捲られ、平手でお尻を打たれた、大きな音がし痛い、体で一番安全な叩き場所である。義務教育八年間終えた頃より禪を締めるようになった。夏の暑い日には禪一本で仕事をする。女のはズロースをはいていた。

禪の字は、示す編に軍と書く、軍隊の兵士が締めて居たのか、昔の武士が締めていたから、こんな字を作ったと思われるが、私には分からない。



私が通信士になり、宮古、釜石の漁船に乗っていた時、帰郷すると、母は作業時に着る下着の外、禪を五・六本くらい作って持たせて呉れた。母が若いとき着ていた着物を染めて、私の洋服を仕立てて呉れた事もある。

二十七才で結婚したが、その役割は若い妻に引き継がれた。長い母船式漁業になると、約半年間赤道直下で操業する。赤道直下と言っても、洋上は三十二度位にしか気温が上昇しない。昼と夜の温度差が少ないから、衣類は余り必要としない、一番役にたつのは禪であった。

禪は木綿の反物を買ってきて、約一メートルに切り、胴周りで結ばれる位の紐を作り、それに縫いつけた、T字型になっている衣類である。簡単な物であるが消耗が早い。一航海に十本位必要とする、汚くなると海に捨てるからだ。

新婚の妻はどんな気持ちで、沢山作って呉れたかが思いやられる。優しくった母をも思いたし涙しながら、このエッセイを書いている。